

科学技術コミュニケーション推進事業「ネットワーク形成型」平成 26 年度採択企画
「継続的なワークショップ運営による情報弱者向けがん情報ツールの作成と普及」

終了報告書

平成 29 年 4 月 30 日

国立研究開発法人国立がん研究センター

目 次

1. 概要	2
1-1. 企画名称	2
1-2. 提案機関	2
1-3. 企画担当者	2
1-4. 企画の実施期間(実施協定の業務実施期間を転記)	2
1-5. 企画概要	2
1-6. 企画の背景・経緯	2
1-7. 具体的な成果(企画提案時)	3
1-8. 目標	3
1-9. 実施体制	5
2. 企画の達成状況	8
3. 活動実績	9
3-1 各地域フィールドにおけるネットワークの形成とワークショップの開催	10
3-2 情報媒体の開発と普及	22
3-3 事業成果の普及	25
4. ネットワークの活用・構築の達成状況	28
1) 逗子ワーキンググループを中心とする神奈川県でのネットワーク	28
2) 堺ワーキンググループを中心とするネットワーク	28
3) 日高ワーキンググループを中心とする北海道のネットワーク	29
4) 全国の公共図書館・がん相談支援センターに向けた普及	30
5. 成果及び波及効果	30
6. 自己評価	33
7. 外部評価	33
8. 成果の展開、発展させるビジョン	33

1. 概要

1-1. 企画名称

継続的なワークショップ運営による情報弱者向けがん情報ツールの作成と普及

1-2. 提案機関

独立行政法人国立がん研究センター

1-3. 企画担当者

提案機関業務主担当者：高山智子（がん対策情報センター がん情報提供部 部長）

提案機関業務副担当者：八巻知香子（がん対策情報センター がん情報提供部医療情報評価室 室長）

1-4. 企画の実施期間（実施協定の業務実施期間を転記）

平成 26 年 8 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日

1-5. 企画概要

がんはわが国の死因の第一位であり、生涯に 2 人に 1 人が罹患するが、必要な情報や理解が普及しておらず、特に高齢者や障害者などの情報弱者が必要な情報に適時にアクセスできる環境整備は喫緊の課題である。

本企画は、がん医療の専門機関が提案機関となり、高齢者や障害者にとってそれぞれ身近な情報提供・教育・学習の場となる公立図書館、点字図書館を核とするフィールドを設定し、医療や福祉サービスの提供機関を巻き込んだネットワークを形成する。この中でがん、病気、健康、医療についての対話を重ねながら情報発信の媒体を共につくることを通じて、情報弱者への健康医療情報の効果的な提供方法のプロトタイプを作成し、全国に普及を図る。

1-6. 企画の背景・経緯

がんは国民の死亡原因の第一位であり、生涯に 2 人に 1 人が罹患する疾患でありながら、実際にはがんになるまで自分事としてとらえることがないこと、致死的なイメージが強いこと、治療選択にも幅があることなどから、がんにかかわる情報普及の必要性は強く指摘されている。中でも障害のある人、高齢者、日本語の読み書きが困難な外国人など、いわゆる情報弱者とされる人々へのアプローチはきわめて手薄な状態が続いている。しかし、情報弱者の立場にある人ほど健康が悪化したときの生活への負の影響は大きく、適切な支援窓口につながることは必須である。

こうした情報弱者になる人々には一定の福祉サービスの窓口が設けられているが、その福祉サービスの領域においては、「がん」は身近な課題ではなく、実際にサービスの利用者ががんを罹患したときに、「がん」についてサポートする窓口が利用されていないことはがん診療連携拠点病院のがん相談支援センターの周知を目的としたセミナーの場でも指摘されてきている。一方、がん診療を専門的に扱う機関では、上場弱者に対応する経験に乏しく、実際に訪れた患者の対応に戸惑い、十分な支援が行われない場合があることは医療者からもしばしば報告される。

患者・国民の側の要因としても、患者には基本的なヘルス・リテラシーが不足していることが挙げられる。それ故に、「がん」に関する情報提供の重要な場面はインフォームド・コンセント（IC）であるが、現在はそれが形式化していると言われている。実証研究の結果でも、患者にはその内容がほとんど理解

されておらず、「インフォームド」されない状態で治療が行われているのが現状である。

よって、本企画においては、「がん」「障害」「情報提供」について、それぞれの情報提供を専門とする機関が連携し、通常分野を超えた対話の機会を継続的にもつプログラムを運営することで、専門分化しているが故に重複するニーズが解決されない状況を改善し、がんに罹患しても慌てることなく生活を維持できるための情報提供環境をつくることを目的とする。

1-7. 具体的な成果（企画提案時）

ワーキンググループの活動を通じて形成される公共図書館・点字図書館、がん診療連携拠点病院、在宅診療、介護支援機関などのネットワークは、引き続き地域における総合的なヘルス・リテラシーおよび情報リテラシー・プログラムの構築と運用の主体となることが期待される。また、この活動の中で具体的な情報媒体の作成を予定しており、その媒体は広く活用可能なものとなる。また、これらの地域資源を結ぶことの利点やその体制作りのためのノウハウも広く共有可能な知見となる。

1-8. 目標

1-8-1. 長期目標

初年度においては、2つのフィールドにおいて参加機関から呼びかける、医療・福祉関係者のネットワークを形成し、ワークショップを5回ずつ実施すること、ワークショップにおいて対象とする利用者（高齢者、障害者）のニーズに関する共通認識の形成、日常のヘルス・リテラシー向上に向けた媒体の作成の方向性を共有することが目標となる。同時にワーキンググループ参加者がサービスを提供する利用者においてがん罹患し、支援を必要とする状況になった場合には、具体的な支援事例をつくっていくことをあわせて目標とする。

2年次には、前年度から継続して実施している2つのフィールドでのワークショップ運営を維持しながら、新たに日高フィールドでの活動を開始し、がん診療連携拠点病院等大きな医療機関が存在しない地域での図書館等を活用したプログラムづくりに着手する。マルチメディア DAISY 等によって作成した媒体は、図書館やがん診療連携拠点病院での積極的な利用方法を探索し、利用者からのフィードバックを受けたコンテンツの評価とそれをふまえた実施方法の検討、継続的なワーキンググループ、ワークショップの運営による公共／点字図書館ーがん診療連携拠点病院連携のプロトタイプ作成、情報拠点とネットワークの活用による、具体的支援事例の試行、作成したコンテンツとプロトタイプの専門家への報告と、フィードバックを受けた改善を目標とする。

最終年次においては、作成した媒体の利用者からのフィードバックを受けたコンテンツの評価とそれをふまえた実施方法の検討を継続して行い、情報拠点とネットワークの活用による、具体的支援事例の蓄積と鍵となる要素の抽出、継続的なワーキンググループ、ワークショップの運営による公共／点字図書館ーがん診療連携拠点病院連携のモデルの作成、作成したコンテンツ、モデルの専門家への報告と、フィードバックを受けた改善を行うことを目標とする。

本企画終了後においても、それぞれの参加機関が加盟・運営する全国組織において、本企画内で開発された手法やツールの普及を行っていく。

1-8-2. 年度目標

（1）平成26年度年度目標

- 逗子市において、高齢者向けがん情報発信のためのワーキンググループを組織する

- 逗子市において、ワーキンググループを機能させながら、主として高齢者を対象に想定した病を身近に感じるために必要なテーマを設定し、図書館利用者が参加するワークショップとテーマ展示、出張相談を行い、病や死、医療に関する情報発信の拠点となる環境をつくる
- 堺市において、視覚障害者向けがん情報発信のためのワーキンググループを組織する
- 堺市において、ワーキンググループを機能させながら、点字図書館利用者や障害者を支援する人たち(福祉等)が参加するワークショップを開催し、障害者(特に視覚障害者)の医療情報ニーズへの意識喚起とニーズを見つけた際に利用できる資源について周知する

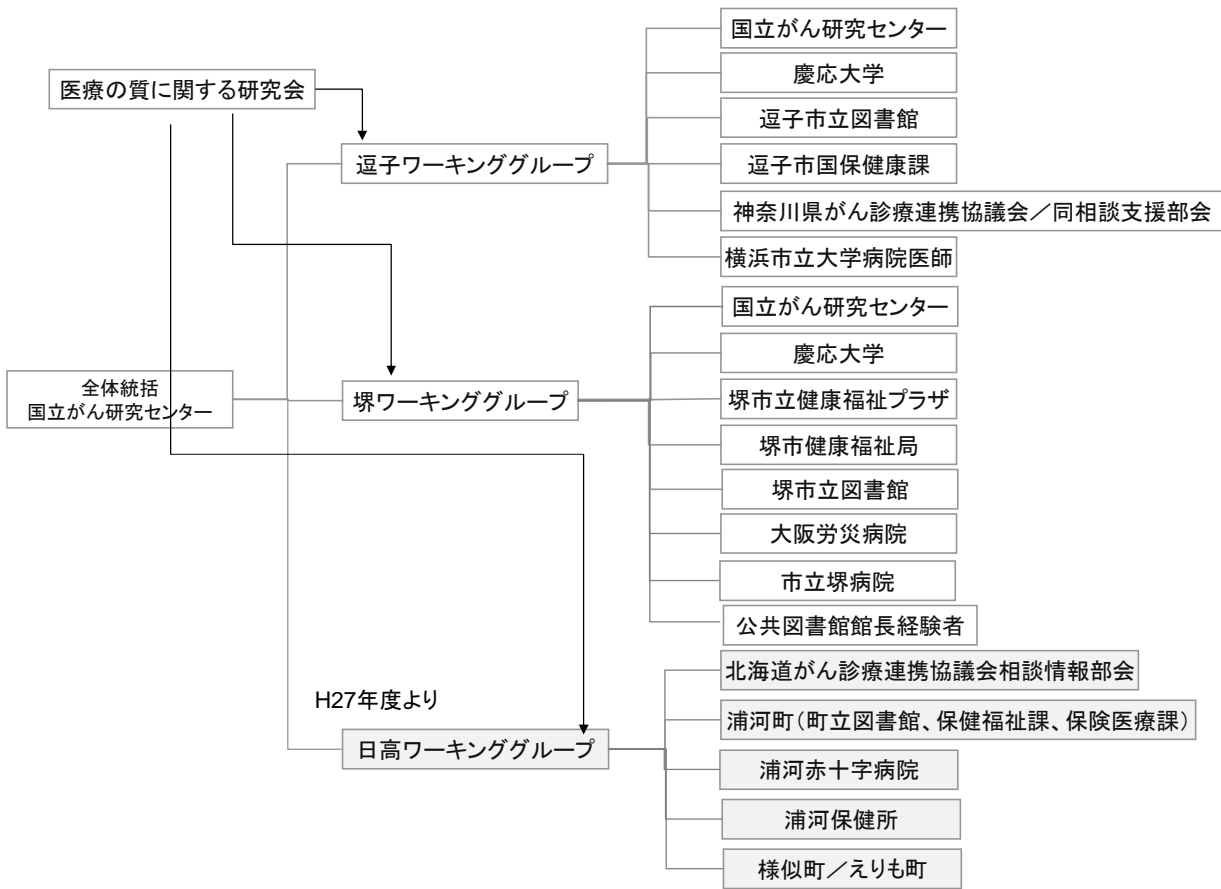
(2) 平成 27 年度年度目標

- 作成した媒体の利用者からのフィードバックを受けたコンテンツの評価とそれをふまえた実施方法の検討
- 継続的なワーキンググループ、ワークショップの運営による公共／点字図書館ーがん診療連携拠点病院連携のプロトタイプ作成
- 情報拠点とネットワークの活用による、具体的支援事例の試行
- 作成したコンテンツとプロトタイプ of 専門家への報告と、フィードバックを受けた改善

(3) 平成 28 年度年度目標

- 作成した媒体の利用者からのフィードバックを受けたコンテンツの評価とそれをふまえた実施方法の検討
- 情報拠点とネットワークの活用による、具体的支援事例の蓄積と鍵となる要素の抽出
- 継続的なワーキンググループ、ワークショップの運営による公共／点字図書館ーがん診療連携拠点病院連携のモデル作成
- 作成したコンテンツ、モデルの専門家への報告と、フィードバックを受けた改善

1-9. 実施体制



全体統括：国立がん研究センター

若尾文彦（がん対策情報センター長 プロジェクトの監督）／高山智子（がん対策情報センター 部長：全体運営・逗子 WG 責任者、本事業主担当者）／八巻知香子（がん対策情報センター 室長：堺 WG・浦河 WG 責任者、本事業副担当者）／池山晴人（がん対策情報センター 室長：堺 WG 担当者・2015 年度末にて異動）／早川雅代（がん対策情報センター 室長：逗子 WG 担当者・2015 年度より）

慶応大学

田村俊作（文学部 図書館情報学 教授）、池谷のぞみ（文学部 図書館情報学 教授）：逗子 WG、堺 WG メンバー、全国の公共図書館向け事業との連携担当

医療の質に関する研究会

河原和夫（理事長）、郡司篤晃（理事・2015 年 9 月逝去）、田口空一郎（事務局長・2015 年度より）、沖田翔（研究員・2015 年度より）：患者図書室運営に関わる資料（選書リスト、リンク集等）、患者図書室ネットワークとの連携担当

逗子市立図書館

小川俊彦（館長）、相山玲奈（図書館員）、吉見國子（司書・2014 年度担当・異動）、井元有里（司書・2015 年度より）：逗子 WG の主担当、図書館での展示・講演会主催

逗子市福祉部国保健康課

山田寛子（福祉部国保健康課健康係 保健師）、青山恭子（福祉部国保健康課健康係 保健師）：逗子 WG メンバー、市の健康事業との連携担当

横浜市立大学医学部／附属病院（個人として参加）

斎藤真理（附属市民総合医療センター 緩和ケア部長）、市川靖史（医学部 主任教授）：逗子 WG メンバー、医療・医学的見地からのプログラム提案

神奈川県がん診療連携協議会情報相談部会

清水奈緒美（部会長 神奈川県立がんセンター専門看護師）、佐野紀子（神奈川県立がんセンター社会福祉士）、勝呂加奈子（神奈川県立がんセンター看護師・2016年度より）：逗子WGメンバー、拠点病院がん相談支援センターとの連携担当

堺市立健康福祉プラザ

岩井和彦（センター長、2014年10月逝去）、原田敦史（点字図書館長）、高橋三智世（主任）、王田桂子：堺WG 主担当、まちライブラリープラザ「ひといき」運営、障害者福祉分野との連携担当

堺市健康福祉局

梶山直美（参事）、稲葉和紀（係長）、西本夕紀（保健師・2015年度より）：堺市WGメンバー、市の健康事業との連携担当

堺市立図書館

浦部文子（堺市立西図書館館長）、岡野美千子（堺市立西図書館主査）：堺WGメンバー、公共図書館との連携担当、「ひといき」運営サポート

大阪労災病院

中迎昭子（メディカルサポートセンター室長）、平尾はるみ（同 看護師長・2015年度より）石井世津子（同 ソーシャルワーカー）宮崎（松延）さゆり（同 緩和ケア認定看護師）：堺WGメンバー、拠点病院がん相談支援センターとしての活動との連携担当

堺市立総合医療センター（旧：市立堺病院）

池田恢（放射線科 科長）、吉田洋子（地域医療連携室 室長）、柳川富久美（同 看護師長）、金森未希（同 ソーシャルワーカー）、古谷緑（同 がん看護専門看護師）、宮川治子（手話通訳士）：堺WGメンバー、拠点病院がん相談支援センターとしての活動との連携担当

公立図書館長経験者

巽照子（元東近江図書館長）：公共図書館における健康医療情報提供の実務ノウハウの提供

北海道がん診療連携協議会相談情報部会（2015年度より）

加藤秀則（部会長 北海道がんセンター副院長）、木川幸一（都道府県がん診療連携拠点病院相談支援センター 北海道がんセンター係長）、金澤友紀（同 ソーシャルワーカー）、中嶋綾（同 ソーシャルワーカー・2016年度より）、岩井和浩（王子総合病院 副院長）、渡辺公明（同 地域医療支援部 室長）、梅木秀俊（苫小牧市立病院ソーシャルワーカー）：浦河WGメンバー、がん診療連携拠点病院としての事業との連携担当

浦河町（2015年度より）

小野多圓（健康福祉課 課長）、盛美穂子（同 主査 保健師）、三浦良一（保険医療課 課長）、可知俊泰（保険医療課 係長・異動）、松本雅彦（同 2015年度より）：浦河WG 主担当、町内ネットワーク・事業との連携担当

浦河町立図書館（2015年度より）

中野蓉子（町立図書館 館長）、山田史恵（同 主任司書）

浦河赤十字病院（2015年度より）

森田優（事務部長・2015年度まで）、長谷川誓一（事務副部長・2015年度まで）：浦河WGメンバー、地域の医療機関としての事業との連携担当

浦河保健所（北海道日高振興局保健環境部保健福祉行政室）（2015年度より）

柏木 聖美（主査）：道庁の機関である保健所として、ワーキンググループへの参加、その他道行政との連携調整

様似町（2015年度より）

中村秀則（保健福祉課 課長）、佃武司（同 主幹）、森山寛子（同 主査 保健師）、小林加奈子（同 保健師）：日高管内の町行政として、ワーキンググループへの参加、ワークショップの町民への周知

えりも町（2015年度より）

福沢昌幸（保健福祉課 課長）、中野知子（同 保健指導係長）：日高管内の町行政として、ワーキンググループへの参加、ワークショップの町民への周知

九州地域 がん診療連携拠点病院がん相談支援センター（いずれも個人として参加・2015年度より）

中迫正臣（国立大学法人佐賀大学医学部附属病院がん相談支援センター 医療ソーシャルワーカー）

青木美帆(国立大学法人長崎大学病院がん相談支援センター 医療ソーシャルワーカー)、
安達美樹(国立大学法人熊本大学医学部附属病院がん相談支援センター 相談員)、
田畑真由美(国立大学法人鹿児島大学病院がん相談支援センター 緩和ケア認定看護師)、
鈴木斎王(国立大学法人宮崎大学医学部附属病院地域医療連携センター センター長)、
平山由佳(国立大学法人大分大学医学部附属病院 がん相談支援センター 看護師長)、
樋口美智子(地方独立行政法人 那覇市立病院 がん相談支援センター 相談員)

以上の役割:九州圏内での図書館とがん相談支援センターの連携についてネットワーク形成のための準備を行う。

九州地域 がん診療連携拠点病院がん相談支援センター、図書館員(いずれも個人として参加・2016 年度より)

生野 秀子 大分赤十字病院
竹村 陽子 大分赤十字病院 がん相談支援センター
竹山 由子 九州がんセンターがん相談支援センター
井口 景子 福岡県立図書館
山崎 友理 福岡市総合図書館
藤田 祥子 佐賀県立図書館
中迫 正臣 佐賀大学医学部附属病院 地域医療連携室
大串 麻衣 佐賀県庁
四谷 雅代 長崎県立長崎図書館
手水 真理子 長崎みなとメディカルセンター市民病院 医療連携センター
生魚 一久 熊本県立図書館
境 桂子 熊本大学医学部附属病院 がん相談支援センター
藤本 真之介 熊本県庁
野上 久見子 宮崎県立図書館
黒木 愛子 宮崎大学医学部附属病院 地域医療連携センター
村田 天秀 宮崎県庁
西村 真美 鹿児島県立図書館
大藺 正広 鹿児島大学病院
具志堅 香織 沖縄県立図書館
大久保 礼子 琉球大学医学部附属病院 がんセンター

以上の役割:九州圏内での図書館とがん相談支援センターの連携についてネットワーク形成のための準備を行う。

北日本地域 がん診療連携拠点病院がん相談支援センター、図書館ならびに行政(いずれも個人として参加・2016 年度より)

富樫知洋 秋田県 健康福祉部健康推進課がん対策室がん対策班
森川聡子 宮城県 疾病・感染症対策室がん対策班
藤岡千穂 岩手県 医療政策室
木村真由美 山形県 健康長寿推進課
北島功寛 北海道 保健福祉部健康安全局地域保健課がん対策・健康づくりグループ
豊田一寿 山形県立図書館 企画課運営
工藤嘉一 北海道立図書館 利用サービス部利用サービス課
奈良岡裕子 青森県立図書館 企画支援課
大場真紀 宮城県図書館 資料奉仕部一般図書班
吉田孝 秋田県立図書館
田中信乃 福島県立図書館 資料情報サービス部地域資料チーム
中嶋綾 北海道がんセンター 地域医療連携室
飯村健治 青森県立中央病院 医療連携部がん相談支援センター
秋山みどり 秋田大学医学部附属病院 がん相談支援センター

稲村みどり 山形県立中央病院 医療相談支援センター
渡邊美伊子 福島県立医科大学付属病院 腫瘍センター
星真紀子 宮城県立がんセンター がん相談支援センター
真溪淳子 東北大学医学部付属病院 地域医療連携センター がん診療相談室

以上の役割:北日本圏内での図書館とがん相談支援センターの連携についてネットワーク形成のための準備を行う。

外部評価委員

常世田良氏 立命館大学 教授(図書館学)、元日本図書館協会事務局次長

岡本直幸氏 元NPO法人地域がん登録全国協議会理事長

工藤孝志氏 神奈川ライトセンター 所長(2015年3月まで。2015年4月に異動のため外部評価委員辞任)

2. 企画の達成状況

継続的なワーキンググループ、ワークショップの運営は、3つのそれぞれ特徴のあるフィールド運営により、3年間の間にそれぞれの地域事情に応じた3つのプロトタイプを提案することができた。

逗子フィールドにおいては、医療機関、行政、図書館に市民団体等も加わり、寸劇というナラティブな手法で「身近に感じる」方法を発案し、来場者の反応からも効果が確認できた。最終年度においては、このナラティブな情報としての利点を生かしつつ、かつ堺フィールドの実践にヒントを得ながら、繰り返し再現可能なコンテンツを作成、上映する形式を確立した。

堺フィールドにおいては、連続講座の形で講演会を実施すること、また本を媒介にして病や健康、生死を語るという場の作り方について安定した運営方法を発案した。1年次、2年次に開発したコンテンツをさらに精錬させ、特定の講演会以外でも日常的に用いることのできるコンテンツを作成できた。これにより、一過性のイベントによるインパクトと、日常的に流布させる情報普及の両面を同時に取り組む手法が作成できたといえる。障害のある人への配慮に特化した試みとしても、医療者向け研修会の実施準備が整い、点字図書館を一つの中核にすえた堺フィールドの知見を、参加機関だけでなく、広く地域の医療機関に向けて還元することにも成功した。

日高フィールドにおいては、医療過疎地における遠隔地の医療機関からの支援という地理的なハードルの高い条件下での試みであり、その中で実現、維持可能なプロトタイプを見出すことができた。

各フィールドにおける取り組みは、いずれもコンテンツ、手法ともに他地域でも広く応用できるものであり、後述するとおり、全国の図書館、医療、行政関係者にも普及させるための企画も3回実施し(図書館総合展、九州・沖縄ブロックワークショップ、北日本ブロックワークショップ)、当初の想定以上の成果を上げることができた。

3. 活動実績

申請時点では、2 か所（逗子、堺）でのフィールド運営とそこで発案する手法やコンテンツの普及を目的としていたが、初年度の成果を踏まえてフィールドを3 か所に設定し、異なる特徴と力点をもった活動を実施した。その結果、国内の様々な地域で応用可能な知見をメニューとしてそろえることができた。

3地域の特徴と課題

	逗子市	堺市	浦河町
人口	57,714	839,268	13,193
面積	17	150	694
人口密度	3328	5595	19
高齢化率 (全国:25.1%)	30.6%	21.5%	25.9% (H24年)
強み・特徴	<ul style="list-style-type: none"> • 比較的狭い地域 • 都市部にも近い • 高い高齢化率 • 高齢者に向けて 	<ul style="list-style-type: none"> • 都市型機能の充実 • 市内で機能の完結 • 大組織での運営の難しさ • 障害のある人へ 	<ul style="list-style-type: none"> • 遠隔地からの支援 • 小さい町ならではの地縁 • 過疎地域を支える
共通課題	<ul style="list-style-type: none"> • 各機関地域で生まれたネットワークを生かして、具体的な利用者支援の場面でよりよい連携を生む仕掛け • 「医療健康情報」という幅広い情報のどこをどのように伝えていくのが効果的であるのか、俯瞰・整理したアプローチ • 事業終了後も継続し、かつ、他地域に浸透させていけるようなしくみ（マンパワー、モチベーション、マネジメント、資金等）の抽出 		

最終年度には、これまでに築いた各フィールドでのネットワークと、これまでに開発したプログラムやコンテンツを組み合わせながら、それぞれの地域に適した企画を実施すると共に、蓄積したノウハウやアイデアを全国に発信する取り組みを十分に実施することができた。特に、エンドユーザーとなる市民を対象とした活動だけでなく、それらの活動を企画する立場にある全国の図書館やがん相談支援センターに向けて発信できたことの意義は極めて大きい。

ネットワーキング

平成 26 年度

それぞれのフィールドにおいて、実際のワーキンググループを逗子においては4回（契約発足前々日を含めると実質5回）、堺においては6回（年度内に決定している予定を含めると7回）のワーキンググループを行い、互いの機関の特性や役割について十分に情報共有を行ったうえで具体的な活動を展開できた。また、それぞれの行事にあわせて外部評価委員会を開催し、図書館、障害者福祉、がん医療の各専門家からの助言を得て、それぞれの行事の振り返りを行っている。これらの意見を踏まえて、3月5日には合同で外部評価委員会を行った。



第 2 回外部評価委員会(逗子:12 月 12 日)

3-1 各地域フィールドにおけるネットワークの形成とワークショップの開催

①逗子フィールド

【平成 26 年度】

初年度には 4 回(契約発足前々日を含めると実質 5 回)のワーキンググループを行い、互いの機関の特性や役割について十分に情報共有を行ったうえで具体的な活動を展開できた。

参加型イベントとしては、逗子市立図書館と隣接する市民交流センターを会場として、医療専門家、市の保健行政担当者(保健師)、図書館司書、がん相談支援センター相談員それぞれの立場から、がんの基礎知識、がん検診、逗子市立図書館で閲覧できるがん関連の資料、神奈川県内のがん相談支援センターについての紹介があり、参加者からの積極的な質問に答えた。また、講演会終了後には、出張がん相談を実施し、7 名の高齢者やその家族からの相談に対応した。

逗子市立図書館 健康・医療講演会「胃がんとその遭遇～まさか私が！～」

日時:2014 年 12 月 12 日(水) 13:30～15:00

場所:逗子文化プラザ 市民交流センター 2 階会議室

参加者:72 名

はじめに 逗子市立図書館 健康・医療講演会について

高山 智子(国立がん研究センターがん対策情報センター 部長)

基調講演「胃がんとその遭遇～まさか私が！～」

市川 靖史(横浜市立大学附属病院 がん総合医科学 主任教授)

「心配になったら？胃がん検診はどこで受けるの？」

山田 寛子(逗子市役所 福祉部国保健康課健康係 保健師)

「本から知ろう、胃がんについて」

吉見 國子(逗子市立図書館 司書)

「がんについての何でも相談、がん相談支援センターのご紹介」

清水 奈緒美(神奈川県立がんセンター 患者支援センター がん看護専門看護師)

がん出張相談(ご希望の方のみ)



【平成 27 年度】

二年次には、9 回のワーキンググループを実施し、密に協働する関係を築きながら、医療機関、行政、図書館に市民団体等も加わり、寸劇という手法で、「身近に感じる」ためのプロトタイプを生み出すことを試み、来場者の反応からも効果が確認できた。この取り組みの台本をはじめとする素材やノウハウは全国に向けて提供可能となった。

「病や死を身近に感じる」ことを実現するため、講演会形式ではなく、映画上映と、オリジナルの寸劇の上演というナラティブな手法を採用することとした。寸劇は、原典の作者は本事業の参加者である齊藤真理医師(横浜市立大学附属市民総合医療センター)、脚本の執筆や出演も本事業の参加者によって行なわれた完全オリジナル作品である。この試みは非常に多くの参加者と労力を必要とする形であったが、完全オリジナルであることにより、今後、同じ作品を各地で上映することも可能であり、「学ぶ」だけでなく、「感じる」ことによる働きかけが可能な試みを開発することができた。

逗子市立図書館 健康・医療ワークショップ

日時: 2015 年 10 月 27 日(火) 13:00~16:30

場所: 逗子文化プラザ さざなみホール

第 1 部の映画鑑賞会と第 2 部のミニシアターの構成で実施した。ミニシアターは、がん診療連携拠点病院の医師や相談員、市の保健師、図書館員、地元の市民団体のメンバーらが演じる寸劇である。

今回の企画は、医療を生活の中でより身近なものとして感じていただくことをテーマに、単に言葉で伝えられる情報、内容を演じて伝えることにより、市民のみなさんに医療現場で起こることを、より現実の場面に即した具体的な考え方、対応方法などを伝えられないかということで企画された。またほぼ毎月逗子市立図書館で行われている映画鑑賞会の映画と合わせて、(素人の)寸劇だけでは伝えきれないこと、病気になったときに、私たちの心に、そして身の回りに起きることなども伝えていけるかもしれない、ということで、寸劇のテーマに関係した映画、「最高の人生の見つけ方」と合わせて構成されたワークショップとなった。



第1部では、ジャック・ニコルソンとモーガン・フリーマンが主演を演じる「最高の人生の見つけ方」を上映し、休憩の間には、映画にまつわるエピソードにちなんだ本の紹介(ブックトーク)が、スライド動画で流された。

第2部は実話をもとに作成された寸劇である。肺がんと診断されたお母さんを連れて息子が別の病院を受診する場面から始まり、病院で経験するであろう場面、治療の選択にあたって考えなければいけないこと、相談できる窓口などが、医療者と市民団体による寸劇でリアリティをもって紹介された。また、医師の説明を理解するための助けとして、書籍を利用することについて、逗子市立図書館司書からの説明も交えて進行された。



あわせて図書の展示も行われ、参加者が手にとっていき姿が見られた。

【平成28年度】

当初からテーマとしてきた「病や死を身近に感じる」ことを実現するため、昨年度には実施した映画上映と、オリジナルの寸劇による試みにより「学ぶ」だけでなく、ナラティブな情報の提示により「**感じる**」ことによる働きかけが可能な試みを開発した。ライブによる寸劇は繰り返しの実施が困難であるため、今年度はストーリーを持たせた「感じる」手法を活用した映像資料(画像、字幕、ナレーション)を作成し、逗子フィールドの中心となっている逗子市立図書館の定期映画上映会「名画座」、神奈川県立がんセンターがん相談支援センターが実施する市民向け講演会において上映し、啓発する試みを実施した。

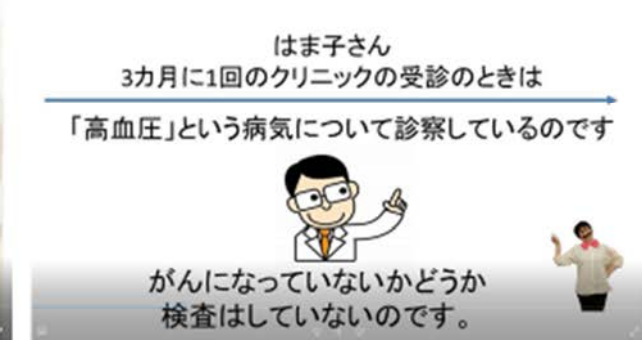
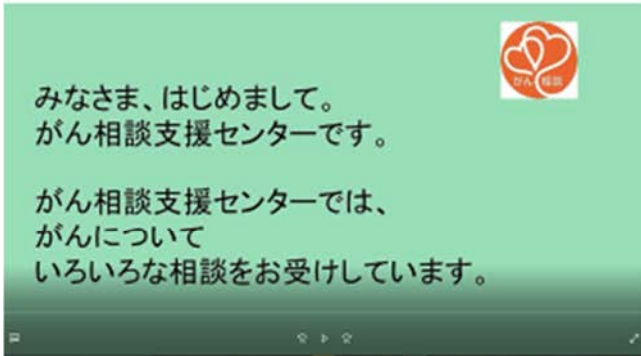
作成したコンテンツは、がん検診やがん相談に関わるよくある誤解が喫茶店の客の四方山話で語られ、それを喫茶店のマスターが正しく解説するというショートストーリー、健康にまつわる図書を興味関心を引き出しながら紹介するブックトークである。全上映時間は5分30秒で、映画や講演会の開始前の待ち時間に適した長さに編集した。

これらのコンテンツを上映するにあたり、図書館の映画上映会では、図書に馴染みのある聴衆であることから、ブックトーク、がんの啓発の順に、がん相談支援センターが実施する講演会では、がん啓発、ブックトークの順に上映した。実際に上映した企画は以下の通りである。

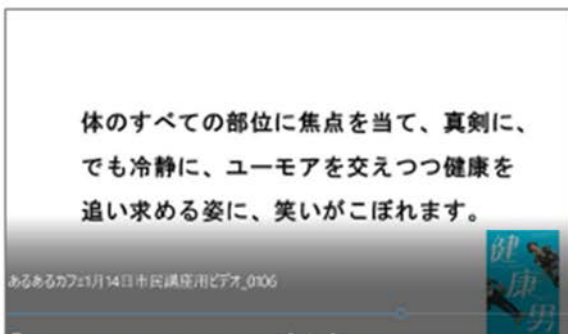
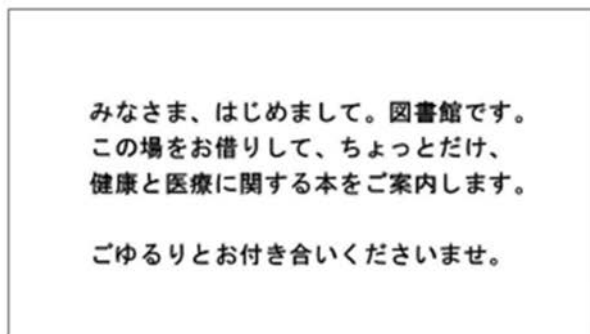
2016年10月25日	逗子市立図書館 名画座上映会 参加者数 60名
2016年11月22日	逗子市立図書館 バリアフリー映画上映会 参加者数 94名
2017年1月14日	神奈川県立がんセンター 一般市民公開講座 参加者数 202名
2017年1月21日	神奈川県立がんセンター患者・家族対象研修会「乳がんを経験した方へ」 参加者数 76名
2017年1月24日	逗子市立図書館 名画座「シャレード」上映会 参加者数 60名

そのほか、これらのコンテンツ作成と上映後の振り返りのため、上映会を除いて2月6日時点で7回のワーキンググループを開催した。また、この逗子フィールドでの実践は後述する、九州・沖縄ブロックワークショップにおいて好事例の一つとして取り上げた。

がん啓発コンテンツ「あるあるカフェ」シーンより



ブックトークシーンより



②堺フィールド

【平成 26 年度】

堺においては初年度には7回のワーキンググループを行い、互いの機関の特性や役割について十分に情報共有を行ったうえで具体的な活動を開始した。12月7日障害者施設である堺市立健康福祉プラザを会場として、集客の見込めるフェスティバルにあわせて開催した。情報保障として、手話・要約筆記を配置し、また大

阪労災病院、市立堺病院から相談員の派遣を受けて、出張型でのがん相談に対応し、実際の利用者は2名と限られてはいたものの、障害があり、がんに罹患した方の相談に対応した。

【プログラムと演者】

はじめの挨拶 原田敦史(堺市立健康福祉プラザ視覚・聴覚障害者センター 点字図書館長)

基調講演:図書館・医療・福祉の連携でできること 田村 俊作(慶応大学文学部 教授)

シンポジウム:図書館・医療・福祉の連携をめざして

医療・福祉・図書館の連携事業が目指すもの 八巻知香子(国立がん研究センターがん対策情報センター)

大阪労災病院 がん相談窓口の取り組み 石井世津子(大阪労災病院 メディカルサポートセンター)

市立堺病院 がん拠点病院としての新たな歩み 柳川富久美(市立堺病院 地域医療連携室)

堺市の保健センターでの事業について 稲葉和紀(堺市健康福祉局 健康部 健康医療推進課)

堺市立図書館における健康情報の提供について 浦部文子(堺市立西図書館)

「まちライブラリープラザひといき」OPEN 高橋三智世(堺市立健康福祉プラザ 視覚・聴覚障害者センター)

おわりの挨拶 若尾文彦 (国立がん研究センターがん対策情報センター センター長)



【平成 27 年度】

初年度に確立した、点字図書館、がん診療連携拠点病院、公共図書館、行政の連携ネットワークの下、情報コーナーとして運営を続ける「まちライブラリープラザ『ひといき』公開講座」を3回実施した。当初4回を計画していたが、4回目のテーマとして掲げていた「がん患者団体との連携」については、堺市の患者団体の活動状況・成熟度を考えた場合、時期尚早と判断されたため、3回のシリーズとして実施した。

特に第3回の公開講座では、逗子フィールドで開発した、ナラティブで、「感じる」ことのできる情報提示を画像芝居という形で作成し、さらに繰り返し利用可能なコンテンツとして完成させることができた。

第1回ひといき公開講座:もし、がんになったら?—早く見つけて楽に治そう!—

日時:2015年4月18日(土) 10:30~12:00

場所:堺市立健康福祉プラザ 4階 交流広場

会場である、堺市立健康福祉プラザのフェスティバルにあわせて開催した。

講師として、中山富雄先生(大阪府立成人病センター)を迎え、がんは一般的な病気であること、がんは生活習慣、特にたばこが大きな要因であるががんの原因の多くはまだ解明されていないこと現状の解説、「検診」の実際や特徴、それらを十分に理解した上で、「5年後の自分の健康を守るために」がん検診を受けることの重要性を解説していただ



いた。その後、がん相談支援センター相談員による出張がん相談は、「ちょっと聞いてみたかったことがあるんだけど…」という方など、多くの方が利用され、それぞれの情報や解決策を見いだして帰られた。

第2回:がん検診って何をするの?—がん検診の実際を知ろう!体験会—

日時:2015年7月24日(金)13:00~15:00

場所:堺市立健康福祉プラザ 3階 大研修室

第2回はがん検診はどのようなものなのか、疑似体験も交えて、がん検診を安心して受けていただけるような学習会を企画した。堺市制作のビデオ「あなたを守る家族を守るがん検診」の上映、続いて西本夕紀保健師(堺市健康医療推進課)から堺市のがん検診の実際について紹介があった。障害などのために配慮が必要な場合には、検診の予約の段階で伝えていただければ、受診しやすい方法のご紹介や当日の対応についての配慮(ランプでの合図、車椅子でのレントゲン撮影が可能な病院の紹介など)が可能であるという紹介も交えた点などが、この企画の特徴である。



講演に続いては体験会では、乳がんの触診用モデルを触ってみるコーナー、大腸がん検診の疑似体験コーナー、胃がん検診に使うバリウム・発泡剤の味見コーナー、まちライブラリープラザ「ひといき」紹介コーナー、がん相談コーナーを設けて参加者の皆さんに体験していただいた。ここでも障害のある人が実際に経験することを想定した対応を行い、大腸がん検診の疑似体験では、粘土と検査用キットを使って体験していただき、視覚障害をお持ちの方からは「これは難しいかな」「家族に頼んだ方がいいかな」といった感想が寄せられるなど、障害のある方にも検診を身近に感じていただく一歩となった。

第3回:知っ得!がん情報!活用しよう「がん相談支援センター」

日時:2015年12月06日(日)10:00~12:00

場所:堺市立健康福祉プラザ 3階 大研修室

会場である堺市立健康福祉プラザのフェスティバルにあわせて、がん相談支援センターが「がんかもしれない」というときから、実際に診断を受けたり、治療に臨んだり、またその後の生活のすべてにおいていつでも相談に乗る窓口であることを具体的に紹介する公開講座を実施した。

堺市健康医療推進課による「がん〇×クイズ」でリラックスした後、「私、がんかもしれない・・・、あなたならどうする?」を、紙芝居ならぬ写真芝居をライブ上映した。脚本は松延さゆり緩和ケア認定看護師(大阪労災病院)、声の出演は、この事業に参加している各専門機関の担当者である。



子宮がん検診で精密検査を勧められたのに受診しなかった主人公「花子」が、放置するうちにがんが進行してしまい・・・とある出来事により、その結果をやり直す幸運に恵まれ、今度はきちんと精密検査を受け、その際の不安をがん相談支援センターで相談に乗ってもらうことができ、無事に平穏な生活を続けることができた、というフィクションであり、出演者たちの熱演と、大阪らしいオチのあるストーリーに大きな笑い声も上がる楽しいコーナーとなった。

その後、「自分が、大切な人が、がんになったら・・・?」というテーマで「がん相談支援センター」がどんな場所で、どんな相談ができるのかについて、古谷緑がん看護専門看護師(堺市立総合医療センター)から紹介された。ここでも、高齢や障害などにより、病院の利用に不安がある方も、がん相談支援センターに連絡すれば、相談員が院内の調整をすることができ、困らずに医療が受けられることも紹介された。

講演会の終了後、堺市内のがん診療連携拠点病院である、大阪労災病院、堺市立総合医療センターの相談員による出張がん相談が行われ、法被姿の相談員に気軽に声をかけていかれる参加者の方たちの相談を受けて閉会した。

【平成28年度】

初年度に確立した、点字図書館、がん診療連携拠点病院、公共図書館、行政の連携ネットワークの下、継続的にテンポよく啓発事業を実施する機運を維持した活動を行った。行事を行うにあたっては、本事業において運営する小さな情報コーナー「まちライブラリープラザひといき」で本を媒介としながら病や健康について語る「ブック de トーク」、昨年度の逗子フィールドの企画を取り入れた映画上映とがん啓発の混合企画、継続して実施してきた障害者向け企画、新たな試みである医療者向け企画を実施し、本事業内で培ったネットワークを最大限に発揮した啓発活動を行った。

ブック de トークは、4月、8月、10月、2月(24日を予定)の4回の実施で、参加者が健康や医療、生死に関わる本を持参し、紹介しながら自由に語る緩やかな場である。当初は「ブックトーク」という名称を用いていたが、硬い印象があること、「自由なおしゃべり」を重視した企画であることから、「ブック de トーク」という名称で継続的に実施することとした。その場で紹介された書籍は、いわゆる闘病記、医療者が執筆した治療に関する書籍、発達障害の当事者が作成した絵本から般若心経にまで及び、幅広く病や健康を語る場となった。集客に課題があるが、手法を確立することができたので、来年度以降も公立図書館など、より本に親和性の高い、ふらっと立ち寄る人が多くいる可能性の高い場所において、それぞれの参加機関が実施していくことを予定している。この形式は堺市の事業としての患者サロンにも部分的に採用されており、すでに波及効果を生んでいる。

- 2016年4月23日 第1回ひといきブック de トーク～本と一緒にがんを語ろう～ 参加者数 12名
 2016年8月5日 第2回ひといきブック de トーク～本と一緒にいのちを語ろう～ 参加者数 10名
 2016年10月28日 第3回ひといきブック de トーク～本と一緒にいのちを語ろう～ 参加者数 12名
 2017年2月24日 第4回ひといきブック de トーク～本と一緒にいのちを語ろう～ 参加者数 12名



昨年度から開発してきた、啓発講演会において、「感じる」「味わう」「体験する」といった要素を加える試みは、逗子フィールドでの取り組み、前年度の堺フィールドでの取り組みを融合させた形態に発展させた。映画上映会と啓発ビデオ、講演を組み合わせた「堺市がん情報講座：楽しみながら考えてみるーがんになってもあきらめない人生を送るコツ」は、堺フィールドでは初めて公共図書館を会場として実施した。毎年開催してきた、12月の堺市立健康福祉プラザ障害者週間フェスティバルでは、コーヒーの提供と検診体験、病院の管理栄養士の協力を得た栄養相談を設け、体験や楽しさを両立させたリレー講演会として5時間にわたり実施した。啓発講演会では、昨年度に行政、がん診療連携拠点病院、図書館が協働して「子宮頸がん」についてのブックリストを作成したところ非常に好評であったことから、対策型がん検診が実施されている5種類のがん（胃・大腸・肺・乳・子宮）について同様のブックリストを完成させ、配布した。

別研究事業において実施した視覚障害者の健康医療情報の入手の実態調査より、医療機関、医療者からの情報提供が極めて重要であることが明らかになったため、医療者向け研修障害者差別解消法施行初年度研修「あなたの病院は対応できていますか？ー視聴覚障害のある患者さんへの対応について考えてみようー」を実施した。

2016年7月16日 堺市がん情報講座：楽しみながら考えてみるーがんになってもあきらめない人生を送るコツ 参加者数 53名



2016年12月4日 堺市立健康福祉プラザフェスティバル 参加者数 60名



障害者差別解消法施行初年度研修「あなたの病院は対応できていますか？－視聴覚障害のある患者さんへの対応について考えてみよう－」



そのほか、これらの企画の実施と振り返りのため、10回のワーキンググループを開催した。また、この堺フィールドでの実践は、後述する図書館総合展において好事例として紹介した。

③日高フィールド

【平成 26 年度】

事業の採択当初は逗子、堺での2つの地域での展開を予定し事業を進めてきたが、継続的なワーキンググループの開催と2014年の両地域での講演会、シンポジウムにより、がん診療連携拠点病院が図書館との連携により情報提供・相談支援を行うことの有効性が確認できたため、拠点病院がない医療圏を多数抱える北海道でも事業を展開することとした。日高医療圏をフィールドとして、北海道がん診療連携協議会相談情報部会との連携を構築することで調整し、次年度の活動に向けた準備を行なった。



北海道内のがん診療連携拠点病院と日高医療圏(浦河)

【平成 27 年度】

地域の医療機関である、浦河赤十字病院と、地域行政(町役場)、町立図書館と、近隣医療圏にあるがん診療連携拠点病院との連携を確立すること、その連携を基盤とした町民向け講座の開催に取り組んだ。近隣医療圏といっても、片道3時間となる地域から集まって打ち合わせをすることは大変困難であること、冬の北海道ではその移動すらままならないこと、参加者となりうる町民の多くが漁業や農業に携わっており、その繁忙期を避けなければ町民に受け入れられる企画とならないことなど、継続可能性を考えると、秋ごろに年一回開催することが妥当との結論に達した。参加者は一般町民はもちろんであるが、特に保健推進員や民生委員、医療福祉関係者といった地域のインフルエンサーになることが期待される方たちを主たるターゲットとして周知をはかったところ、予想以上の参加者があり、町民の関心の高さを実感した。

第1回 日高がん情報講座 もっと知ってほしい がんのこと 一知って、備えて、安心へー

日時:2015年11月13日(金) 14:00~16:00

場所:浦河町立総合文化会館 地階 ミニシアター

まず、浦河町からの最寄りのがん診療連携拠点病院の1つである、王子総合病院(苫小牧市)の岩井和浩副院長から、「もっと知ってほしい がんのこと ーがんって何? 検診って? 大腸がんって?」と題した基調講演が行なわれた。各自治体で検診が行われている大腸がん、胃がん、肺がん、乳がん、子宮がんについては、早期に発見できれば治療の負担も少なく、短期で回復できること、治療する確率も高いことなどが紹介された。続いて浦河町保健福祉課の盛美穂子保健師より、浦河町、様似町、えりも町のがん患者数や死亡数といった概況と、3町で実施しているがん検診について詳しく紹介された。日高管内のがん検診受診率が低いこと、3町それぞれに受診しやすい仕組みづ



くりに努めていることも含め、積極的な検診受診が呼びかけられた。

そして、地域の医療機関である浦河赤十字病院の大柏秀樹部長より、浦河赤十字病院で行っているがん治療についての具体的な紹介があった。浦河赤十字病院では、乳がん、胃がん、大腸がんの標準治療を行っており、その他のがんについては患者さんの希望を聞きながら、適切な医療機関への紹介を行っていることなどが紹介されると、参加者の皆さんからの関心も高く、多くの質問が寄せられた。浦河赤十字病院医療相談室の村田藍ソーシャルワーカーからは、医療相談室では、治療・療養に係る生活面や経済面での不安や心配、退院後の生活について気軽に相談できること、病院外のさまざまな機関と連携しながら生活の変化にも安心して治療に専念できるよう相談室の役割が紹介された。続いて、がん診療連携拠点病院である、王子総合病院（苫小牧市）、北海道がんセンター（札幌市）、北海道が指定するがん診療連携指定病院である苫小牧市立病院（苫小牧市）のがん専門相談員からがん相談支援センターについてリレー形式で紹介された。

会の最後には、会場と同じ建物にある浦河町立図書館外部サイトへのリンクの医療関係資料提供サービスと、浦河町立図書館が所蔵するがん関係の資料の「ブックリスト」について、また、この日から開催されるテーマ展示（図書館地階）が中野蓉子館長から紹介され、地下1階に医療関係図書が集められており、パンフレット等も閲覧できること、必要な資料が見つからない場合には、気軽にレファレンスサービス（窓口）を利用していたきたいという呼びかけがあった。

【平成28年度】

地域行政（浦河町、様似町、えりも町各町保健福祉課）を中心に、地域の医療機関である浦河赤十字病院と、町立図書館と、近隣医療圏にあるがん診療連携拠点病院との連携を安定して確立すること、その連携を基盤とした町民向け講座の開催に取り組んだ。最寄りのがん診療連携拠点病院まで片道3時間となる地域の特性を踏まえながら、がん予防やがん検診について住民向け講演会を行った。国立病院機構函館病院の医師を講師として招き、2月11日に開催した。昨年度の実施において予想以上の来場者が熱心に聴講したことから、会場規模を拡大し、100人を超える来場を得た。

この講演会に際しては、堺フィールドで発案し、下記に述べる全国図書館大会でも非常に好評であった、行政・医療機関・図書館の三者が協働して作成するがん啓発ブックリストの作成にとりかかり、本事業終了後も3町の各町立図書館（図書室）が選書したブックリスト、北海道がん診療連携拠点病院が作成するがん相談支援センター等の案内、町行政が作成するがん検診案内が一体となったものを作成、配布することとなった。また、堺フィールド作成したがん検診啓発のDVDの上演、同じく堺フィールドで試みた検診体験コーナーを日高地域の検診事業者の協力を得ながら実施するなど、様々な点でのリソースの制約がある中で、他地域のアイデアを取り入れながら、担当者の負荷を小さく保ったうえで啓発活動を行うためのモデルとなっている。

なお、この準備のため、2回のワーキンググループを開催した。うち1回は、当該医療圏外となる、がん診療連携拠点病院について日高地域の行政の人たちにも身近に知ってもらうことを意図して、苫小牧のがん診療連携拠点病院（王子総合病院）で病院見学を兼ねて実施した。こうした取り組みは、結果として、北海道がんセンターと札幌市立図書館、王子総合病院・苫小牧市立病院と苫小牧市立図書館との自主的な連携関係の発展にも寄与することとなった。

第2回 日高がん情報講座 早期で治るがん！～もっと受けてほしいがん検診～

日時：2017年2月11日（土） 10：00～11：50

場所：浦河町立総合文化会館 3階 ふれあいホール

- * 講演会 予防できるがん、早期発見で元気にされるがん！
～日高でずっと健康で暮らすために知ってほしいこと～

講師 国立病院機構 函館病院 消化器科 部長
がん予防センター センター長 間部克裕 氏

- * がん検診の未受診アンケート結果報告 浦河町
 - * がん検診の実施状況 様似町・えりも町
 - * 図書館が提供しているがん情報
 - * がん相談支援センターのご案内
- 【がん検診模擬体験コーナー 12:00～】
【出張がん相談コーナー 12:00～】

主催： 国立がん研究センター、浦河町、様似町、えりも町、浦河赤十字病院、王子総合病院、苫小牧市立病院、北海道がん診療連携協議会相談・情報部会、北海道日高振興局保健環境部
（「継続的なワークショップ運営による情報弱者向けがん情報ツールの作成と普及」事業参加機関）
協賛： エーザイ株式会社



3-2 情報媒体の開発と普及

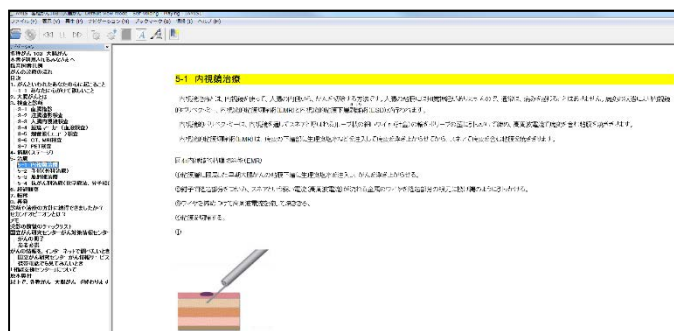
【平成 26 年度】

計画策定時には、具体的にどのような『ツール』であるのかは定まらない面も存在したが、堺ワーキンググループの議論の中で、情報提供の場の運営を重要なツールと定め、『まちライブラリープラザ『ひといき』』を発足

させた。また、視覚障害者が利用できるマルチメディアの録音資料の作成にも着手し、この「ひといき」でも直接利用できるようにするほか、がん情報サービス上(がん対策情報センターが運営するがん情報のポータルサイト)、サピエ(インターネット点字図書館、全国どこからでも利用可能)にて提供していく。また堺のネットワークの相談窓口を紹介し、実際の利用につなげるビデオコンテンツ(手話、字幕、音声つき)についても作成を行った。



- 「ひといき」の利用案内とあわせて連携先の情報を配布
- 必ずボランティアが常駐する体制での運営



弱視の方、読み書き障害など認知障害の方、高齢で視力が衰えている方など、文字と音の両方を使える方に対応できる、マルチメディア DAISY 画面。マルチメディア DAISY 作成チームの養成を行い、公共図書館等での利用拡大を意図している。



本連携事業を周知するための、手話・字幕・音声解説付きのビデオ

【平成 27 年度】

(1) マルチメディア DAISY によるがん情報提供

特に堺フィールドにおいて、障害のある人の医療情報支援のツールとして、マルチメディア DAISY の作成を進めてきた。国立がん研究センターがん対策情報センターが発行する「がんの冊子」約 60 タイトルを中心に作成

を進めてきたが、本年度に一定数のタイトルの完成目処がたったため、来年度以降には、逗子市立図書館、浦河町保健福祉課の端末でも同素材をインストールし、紙媒体での情報を得にくい利用者への支援に活用することとした。

(2)「親しみやすい」「印象に残る」コンテンツ開発

逗子フィールドでの寸劇、堺フィールドでの電子紙芝居方式のドラマは、他の地域・場面でも活用可能な素材となりうる。シナリオの提供や、電子紙芝居の DVD 化を行い、継続的な利用可能な媒体を作成した。



【平成 28 年度】

2 年次に開発した逗子フィールドでの寸劇、堺フィールドでの電子紙芝居方式のドラマは、他の地域・場面でも活用可能な素材となる。また 1 年次に作成した堺フィールドの DVD は手話字幕音声解説が付されており、障害者差別解消法に沿った公的機関の広報ツールとしての一つのモデルコンテンツである。これらの着想を互いに取り入れ、堺フィールドのコンテンツについては、電子紙芝居および事業 DVD の再編集を行なった。逗子では、2 年次の着想を活かし、堺の電子紙芝居方式を導入した「あるあるカフェ」と「ブックトーク」の映像化を行なった。年度内に、2 年次の寸劇を電子紙芝居化、ならびに 3 コンテンツの手話字幕音声解説付与による再編集を行なう予定で進めてきた。これらのコンテンツは広く利用可能であり、エンターテインメントエデュケーションの手法とも合致し、本事業終了後もそれぞれのフィールドのみならず全国的に利用可能なコンテンツとなる。

また、初年度より取り組んできた、障害のある人の医療情報支援のツールとして、マルチメディア DAISY の作成を進めてきた。国立がん研究センターがん対策情報センターが発行する「がんの冊子」約 60 タイトルについては着実に作成が進んできた。これらのコンテンツはインターネット上の点字図書館である「サピエ」、また誰でもアクセスできる「がん情報サービス」に掲載していく。こうしたコンテンツは継続的な更新作業が必須であり、その体制を整えることができた。

3-3 事業成果の普及

【平成 26 年度】

また、公共図書館の全国ネットワークとの連携の必要性について指摘を受けていたが、日本学術振興会による、「アクションリサーチによる公共図書館課題解決のデザイン」研究班との連携を進め、1月29日には、同研究班主催による「公共図書館員のための医療情報サービス研修会 in 大阪」を共催した。



公共図書館員のための医療情報サービス研修会 in 大阪

【平成 27 年度】

九州・沖縄地区 図書館&がん相談支援センター連携ワークショップ「いつでも、どこでも、だれでもが、がんの情報を得られる地域づくりをめざして」(主催: 国立がん研究センターがん研究開発費「がん情報の収集と効果的な活用、そして評価の在り方に関する研究」、科学研究費助成事業「市民の健康支援のための価値互酬型サービスを支える知識共同体の構築」、福岡県立図書館)に協力し、本事業のブロック単位での普及をはかる足がかりを築いた。



【平成 28 年度】

最終年度には、各フィールドで行なってきた図書館とがん相談支援センターの連携による実践を全国的に周知、発信することにも特に力点を置いて取り組んだ。

第18回図書館総合展（2016年11月8-10日） パシフィコ横浜

当事業のフォーラム、ブース参加者数約300名

全国の図書館関係者が最も集まる場所となっている、第18回図書館総合展においては、主催者企画フォーラムとして90分のセッションを実施した。このフォーラムでは、本事業の場フィールドでの取り組みを中心に、がん相談支援センター、図書館の立場からのコメントも交えながら事業成果の周知を行った。期間中3日間出展したブースにも多数の人が立ち寄り、少なくとも約300名の図書館関係者がフォーラムやブースに興味をもって参加し、周知を行なうことができた。

**図書館の健康情報コーナーの
先にあるもの**

医療・福祉側からの期待とこれからの可能性

司会：
高山智子（国立がん研究センターがん対策情報センター）
田村俊作（慶応大学文学部図書館情報学）

第18回 図書館総合展 主催者セッション
日時：2016年11月9日（水）10:00～11:30
場所：パシフィコ横浜 アタックスホール2階 202

プログラム

1. 医療・福祉側から図書館への期待～図書館と医療福祉の連携プロジェクト概要～
 - ・ 八巻知香子（国立がん研究センターがん対策情報センター）
▶ 専攻職 医師 上級
 - 連携プロジェクトを進める中で見えてきたもの、これからの可能性～堺市の取り組み
 - ・ 原田敦史（堺市立健康福祉プラザ）
 - ・ 古谷輝（堺市立総合医療センター）
 - ・ 岡野美千子（堺市立西図書館）
2. がん相談支援センターからの期待、図書館との関係づくり～河内長野市の取り組み
 - ・ 高谷和広（大阪府医療センターがん相談支援センター）
3. 図書館と医療福祉との連携の課題とこれからの可能性、そして一冊大事なこと
 - ・ 小川俊彦（逗子市立図書館 部長）
▶ 逗子市立図書館 フォーター 上級

■ 総括

- ・ 田村俊作（慶応大学文学部 図書館情報学 名誉教授）

■ さらなる“身近な”実践事例紹介 ワークショップのご案内

- ・ 九州WS in 大分県立図書館、東北WS in 岩手県立図書館



九州・沖縄ブロック図書館&がん相談支援センター連携ワークショップ 「いつでも、どこでも、だれでもが、がんの情報を得られる地域づくりの第一歩（第2弾 in 大分）」

2016年11月28日 大分県立図書館 参加者数92名

昨年度に引続き2度目の開催となる、九州・沖縄地区 図書館&がん相談支援センター連携ワークショップ「いつでも、どこでも、だれでもが、がんの情報を得られる地域づくりの第一歩（第2弾 in 大分）」では、逗子フィールドでの実践ならびに、昨年度本事業において実施した初回の九州・沖縄地区ワークショップも有用な契機となりながら自発的な取り組みが進んでいる福岡、大分の事例が報告され、92名が参加し、実践例についての情報を共有すると共に、直接のネットワーキングの場となった。

**第2回 九州・沖縄地区 図書館&がん相談支援センター連携ワークショップ
「いつでも、どこでも、だれでもが、がんの情報を得られる地域づくりの第一歩」**

日 時： 平成28年11月28日（月） 13:00～16:30
会 場： 大分県立図書館2階 視聴覚ホール及び1 階研修室

本日のプログラム

- 13:00-13:10 開会の挨拶
大分県立図書館 館長 小矢 文則
国立がん研究センターがん対策情報センター 部長 高山 智子
- 13:15-15:00 図書館とがん相談支援センターの取り組みの紹介 【発表25分 質疑5分】
○福岡県での取り組み
「きっかけは、+出会いから。
～つながる・ひろがる～福岡県のがん相談支援センター&図書館」
・飯塚市立飯塚図書館 田中 宏尚
・社会保険田川病院がん相談支援センター 横田 久美子
- 大分県での取り組み
「可能性は∞（無限大）・図書館からのがん情報発信」
・大分県立図書館 長谷部 京子
・大分大学医学部附属病院がん相談支援センター 平山 由佳
- 神奈川県での取り組み
「知る、見せる、伝える～地域で作るがん情報発信～」
・逗子市立図書館 井元 有聖
・神奈川県立がんセンターがん相談支援センター 舘島 加奈子
- 15:00-15:15 休 憩
- 15:15-16:25 シンポジウム「がんの情報を得られる地域づくりの第一歩」
コーディネーター：国立がん研究センターがん対策情報センター 高山 智子
シンポジスト：福岡県・大分県・神奈川県の各発表者
(県内での交流時間含む)
- 16:25-16:30 閉会
- 16:40-17:40 情報交流会 ※（希望者のみ）・・・・・・・・・・・・・第1 研修室



主 催： 国立がん研究センター-科学技術コミュニケーション推進事業機関連携推進ネットワーク形成型「継続的なワークショップ運営による情報弱者向けがん情報ツールの作成と普及」事業班
大分県立図書館
協 力： 科学研究費助成事業「市民の健康支援のための価値互換型サービスを支える知識共同体の構築」班
後 援： 大分県、大分県がん診療連携協議会、大分県公共図書館等連絡協議会、日本図書館協会

北日本ブロック図書館&がん相談支援センター連携ワークショップ「いつでも、どこでも、だれでも、がんの情報を得られる地域づくりの第一歩（in 岩手）」

2017年1月23日 いわて県民交流センター 参加者数 87名

北日本ブロック 図書館&がん相談支援センター連携ワークショップ「いつでも、どこでも、だれでもが、がんの情報を得られる地域づくりの第一歩（in 岩手）」は、北日本（北海道・東北）でははじめての試みであったが、図書館、医療機関、行政関係者計87名が参加した。本事業の日高フィールドでの取り組みを報告すると共に、自発的な取り組みが進む和歌山、福岡の事例も紹介し、点字図書館やがん相談支援センターの立場からのコメントを交えて議論を深めた。ネットワーキングの時間を設けたことにより、すぐにも連携が開始されたことも伝え聞くほど成果が「知る」だけでなく、「実践に移る」ための第一歩となる企画となった。

北日本地区 図書館&がん相談支援センター連携ワークショップ

**いつでも、どこでも、だれでもが、
がんの情報を得られる地域づくりの
第一歩**

2017年1月23日（月）13:00～16:30
いわて県民情報交流センター（アイーナ）

本日の内容

司会：八巻知香子（国立がん研究センター）
田村俊作（慶應義塾大学）

1. 開会あいさつ
2. はじめに
 - 図書館とがん相談支援センターの連携プロジェクトの概要
 - 公共図書館からみたがん相談支援センターとの連携の意義
3. 図書館と相談支援の連携の事例報告
 - 和歌山県での取り組み
 - 福岡県での取り組み
 - 北海道渡辺町での取り組み
4. シンポジウム 「がんの情報を得られる地域づくりの第一歩」
5. 地域別関係者ネットワーク
6. 総括

～中略～
情報交流会





4. ネットワークの活用・構築の達成状況

1) 逗子ワーキンググループを中心とする神奈川県でのネットワーク

【平成 26 年度】

逗子では本事業発足後、4 回(8 月 1 日の契約開始前々日の準備会を含めると実質 5 回)のワーキンググループを実施し、12 月 12 日に講演会を開催した。逗子市立図書館、逗子市国保健康課、横浜市立大学病院医師ならびに国立がん研究センター、慶応大学が継続的に検討に参加することで、図書館がもつ資料を十分に活用しつつ、がん検診を推進する行政、がん医療に携わる専門職の視点からみても有意義となる講演会を企画・実施することができた。また、新たに神奈川県がん診療連携協議会および同情報相談部会もネットワークに参加し、神奈川県下がん診療連携拠点病院の相談窓口であるがん相談支援センターと連携も構築できた。

【平成 27 年度】

逗子では本年度 9 回のワーキンググループと、映画上映と寸劇を組み合わせたワークショップを開催した。寸劇のシナリオ作成を含む諸々の準備段階では、ワーキングメンバーの密な連絡と、各立場からの価値観の共有など、より踏み込んだネットワークが形成された。また、今年度の活動を契機として、ワーキンググループに市民団体(藤沢シニアネット)が来年度から参加する予定となり、逗子ワーキンググループが高齢者等を主たるターゲットとする情報普及を目指しているという点からも、より有効な体制を確立することができた。

【平成 28 年度】

逗子では昨年度までに安定したネットワークの元、ワーキンググループを開催しながら、それぞれの組織が実施する事業で使用できるコンテンツづくり、その利用とフィードバックを行った。十分なネットワークが形成されているため、1、2 年次のような提案機関の働きかけではなく、各機関の活動をサポートするような関わりで取り組みが維持可能であった。

2) 堺ワーキンググループを中心とするネットワーク

【平成 26 年度】

堺では、7 回のワーキンググループの開催し、12 月 6 日にシンポジウムとがんの出張相談を実施した。新年度には 4 月 18 日に公開講座を開催することが具体化するなど、ワーキンググループとして継続的な活動実施が軌道にのった。申請段階では、堺市立健康福祉プラザ 1 施設のみが参加機関であったが、第 2 回の開催より、堺市健康福祉局、堺市立図書館の参加、第 3 回より堺市内に 2 つあるがん診療連携拠点病院(大阪労災病院、市立堺病院)のがん相談支援センター担当者の参加が確保された。12 月 6 日のシンポジウム開催にあたっては、堺ワーキンググループのすべての参加機関から講師を得て市民に連携を伝える場となり、また、2 つの拠点病院による出張がん相談では、障害のあるがん患者さんからの相談に対応し、本ネットワークが機能したからこそそのニーズへの対応となった。

申請時の指摘として、保健所との協力について指摘をいただいたが、堺市の取り組みにおいて、保健センター(堺市は政令市であるため保健センター)を管轄する健康福祉局が直接の参加機関となり、ネットワークの重要な構成員となった。平成 27 年度には、この健康福祉局の事業の一つであるがん検診について、障害福祉の機関である健康福祉プラザに検診車を派遣することと講演会を組み合わせることで、障害のある人も検診を受けてもらえるような取り組みを進める方針となっており、本企画がめざす情報弱者向けがん情報提供は、具体的な市の施策として実現する見込みとなった。

【平成 27 年度】

堺では、9 回のワーキンググループと 3 回の公開型ワークショップを実施した。3 回のワークショップ開催にあたっては、中心となる現地機関が毎回異なり、それぞれの組織の使命・機能の特徴を活かした活動ができた。初年度は提案機関が全体のとりまとめをする形でワークショップを開催したが、3 回のワークショップの開催のたびに、参加機関の関与の程度が増し、司会を含む全体統括等についても参加機関が主体的に担う攻勢となった。来年度に向けては、今年度に発案したアイデアをよりうまく活用すべく対象や実施方法を検討し、すでに全 4 回の企画が構想された。本事業の終了後も地域で自発的な取り組みを継続する下地が十分に形成された。

【平成 28 年】

堺では、合計 7 回の公開型ワークショップを企画し（予定を含む）、その準備のためのワーキンググループを都度実施しながら開催した。安定したネットワークがあるため、提案機関の参加がなくても各行事の実施は可能な体制が確立している。市内各機関で利用可能なコンテンツも完成し、本事業終了後にこのネットワークをどのように活用することができるか、積極的な検討が行われた。事業終了後、別の形でのネットワークの維持、活用についてほぼ目処が立ちつつあるところである。

3) 日高ワーキンググループを中心とする北海道のネットワーク

【平成 26 年度】

当初、上記 2 地域での展開を予定し取り組みを進めてきたが、継続的なワーキンググループの開催と 12 月の両地域での講演会、シンポジウムにより、がん診療連携拠点病院が図書館との連携により情報提供・相談支援を行うことの有効性が確認できたため、拠点病院がない医療圏を多数抱える北海道でも事業を展開することとした。日高医療圏に属する浦河町、浦河赤十字病院、北海道がん診療連携協議会からの協力意思を確認し、ワーキンググループを発足させることとした。

【平成 27 年度】

申請時点では上記 2 地域での展開を予定し取り組みを進めてきたが、本事業の有効性を実感できたため、本年度より、拠点病院がない医療圏を多数抱える北海道でも事業を展開した。日高医療圏に属する浦河町、浦河赤十字病院、北海道がん診療連携協議会からの協力意思を確認し、ワーキンググループを発足させ、4 回のワーキンググループを開催し、1 回の公開ワークショップを実施した。今年度に入り、浦河町保健福祉課を中心に、隣接する様似町、えりも町、保健所(北海道開発局)の参加も得られ、地域の医療機関、行政と異なる医療圏からのがん診療連携拠点病院との連携の一つの形を作り出すことができた。来年度についても継続して事業を展開することで参加者の合意が得られており、地域の実情にあった、持続可能な形への展開に発展できた。

【平成 28 年度】

遠隔となるがん診療連携拠点病院との維持可能な連携の形を模索しながら進めてくる中で、図書館とがん診療連携拠点病院との連携は、日高だけに留まらず、参加している拠点病院（苫小牧、札幌）においてもそれぞれ連携がとられることに発展しており、それぞれの地域での自主的なネットワークが生まれた。各地域での自主的な連携は今後も維持され、また、さらに異なる地域でも広がっていくことが見

込まれた。遠隔の連携については、負担も大きいことから事業終了後の維持可能性についてはどのような形が可能であるのか検討を進めている。

4) 全国の公共図書館・がん相談支援センターに向けた普及

【平成 26 年度】

日本学術振興会による、「アクションリサーチによる公共図書館課題解決のデザイン」研究班との連携を進め、1月29日には、同研究班主催による「公共図書館員のための医療情報サービス研修会 in 大阪」を共催した。堺ワーキンググループのメンバーから複数の参加があり、特に西日本を中心とする公共図書館の医療健康情報担当者とのネットワークができた。

【平成 27 年度】

科学研究費助成事業「市民の健康支援のための価値互酬型サービスを支える知識共同体の構築」班と連携し、同研究班他主催による「九州・沖縄地区 図書館&がん相談支援センター連携ワークショップ「いつでも、どこでも、だれでもが、がんの情報を得られる地域づくりをめざして」に協力した。この事業が最終年度に実施する普及事業の足がかりとなった。

【平成 28 年度】

前述した図書館総合展、九州・沖縄地区ワークショップ、北日本地区ワークショップは、それぞれの関係者に向けた好事例やツールの発信であり、それぞれの地域での新たなネットワークを生み出す契機となった。ワークショップの場そのものがネットワーキングの場であり、本事業の当初の射程以上に広い範囲でネットワークの形成が可能となった。

5. 成果及び波及効果

【平成 26 年度】

1) 逗子フィールドでの成果

逗子においては契約開始後に計4回のワーキンググループを開催して、参加機関相互の役割、本事業において協業可能な範囲の十分な検討の後、高齢者を対象とした講演会「胃がんと遭遇～まさか私が！～」を開催し、予想以上の参加者(72名)を得ることができ、質疑も活発に行われた。あわせて開催した出張がん相談には7名の利用があり、神奈川県がん診療連携協議会として対応したがん相談支援センター相談員からは、病院外で相談活動を行うことの利点が語られ、今後の継続的な活動に意欲が示された。今後はテーマを変えながら、図書館を基盤としながら、がん相談支援センターとどのような形での連携行事が可能であるか、検討を進めていく。

がん相談支援センターからの図書館等への出張相談という形での協力は、発案は逗子ワーキンググループからはじまり、堺ワーキンググループでも取り入れて実施し、今後、北海道の日高ワーキンググループでも応用を検討した。全国に普及できる可能性のある取り組みとなりつつある。

2) 堺フィールドでの取り組み

堺においては、点字図書館を中心に、行政、図書館、癌相談支援センターを構成員とする計6回のワーキンググループを既にも実施し、7回目も2月に開催し、12月のシンポジウム、情報コーナー「まちライブラリープラザ『ひといき』」の開設と運営、また平成27年度には4回程度の公開講座を実施することが具体化し、予定以上

の成果を上げた。これにより、ワーキンググループに参加する機関の相談窓口を訪れる利用者に対して、必要に応じて互いに紹介したり、協働して支援するなど、必要なサポートを適切に提供するための十分な関係が構築できた。この連携関係を市民に周知するためのビデオコンテンツを作成中であり(年度内完成予定)、その情報には音声、一般の画像、手話、字幕をつけることで、障害のある人にも活用可能な媒体にする。このビデオコンテンツはウェブ上で配信すると共に、ワーキンググループの参加機関内(市役所、保健センター、図書館、病院、福祉施設)にあるモニターを利用して、情報提供していく予定であり、日常生活の中で頼れる窓口を知ってもらうことが可能となる。

また、まちライブラリープラザ『ひといき』においては、ボランティアも養成し、自分では情報が探しにくい環境にある障害者を含め、個別に対応できる体制で運営している。また運営にあたっては、市立図書館から団体貸し出しを受けることで、本事業ではカバーできない資料を提供できる環境となった。

この情報コーナーをさらに充実させていくこと、また、視覚障害者の利用が中心である音声資料をより広く利用してもらえるよう、音声だけでなく、テキストや画像と同期した資料、マルチメディア DAISY の作成をはじめることとして、講習会を 2 月に実施し、作成チームを養成する。これにより、国立がん研究センターと堺市立健康福祉プラザの連携によって実施されている音声資料作成は、より多くの情報弱者(視力が低下した高齢者や学習障害者など)の情報利用を支援することができるようになった。

【平成 27 年度】

1) タイプの異なるフィールドで蓄積したノウハウとプロトタイプ

首都圏近郊の比較的小規模の自治体である逗子市、政令市である堺市、北海道の郡部にありがん診療連携拠点病院までの距離が 3 時間かかる日高、とまったく異なるフィールドにおいてそれぞれに可能な公共図書館／点字図書館—がん診療連携拠点病院連携によるワーキンググループを運営してきた。

高齢者の利用が圧倒的に多く、元気な高齢者に近い将来生じうるかもしれない健康リスクへの対応と、適切な医療機関、相談窓口の利用を周知することを目的に取り組んだ逗子フィールドでは、それほど関心の高くない層にも遡及しうる映画鑑賞会と組み合わせ、寸劇という印象に残る手法を用いた公開ワークショップを開催した。このワークショップ開催には、ワーキンググループメンバーの時間と労力を十分に費やす必要があり、ワーキンググループ間の相互理解が深まる経緯ともなった。

堺フィールドでは、市内に関係機関がすべて揃っているという政令市の特性を活かし、密な連携のもと、予防、検診、診断、治療という全てのプロセスを含むシリーズとして 3 回の公開ワークショップを実施した。これらの疾病の過程ではそれぞれの異なる機関が異なる役割を果たしていくことが必要であり、点字図書館が核の 1 つとなったことで、この事業を通じてそれぞれの機関が元々果たすべき役割がより明確となり、これまで十分に手当てがなされてこなかった、重複ニーズのある対象(障害がありがんになった人など)にも十分な情報とサービスの周知をはかる試みが各機関でなされるようになった。

日高フィールドにおいては、地理的な制約から、頻繁な会合や公開講座の開催は現実的に不可能であること、持続可能なモデルの作成につとめた。本年度の計 4 回のワーキンググループ開催の中で、図書館を含む地域の市町村自治体を窓口としながら、道のがん診療連携拠点病院が協力する形での情報普及の形を模索することができ、これは北海道に限らず、いわゆる医療過疎地域において適用可能と思われる。

2) 媒体として利用できる情報源の作成と普及

逗子フィールドにおける寸劇の脚本は、全国で周知を必要とするテーマを扱っており、またすべてをオリジナルに作成したことで、著作権の問題もなく今後要望に応じて全国で活用可能である。

堺フィールドでは、より親しみやすくメッセージを届ける手法として、某テレビドラマの設定をヒントにした、電子紙芝居形式のストーリーを作成したが、テレビ局との著作権交渉も完了し、年度内にDVDを作成する。DVDには手話、字幕、音声解説を付し、市内の保健センター等で上映する予定が既に立っており、一度のワークショップでは伝えられない層への周知が実現する見込みである。

本事業において堺市立健康福祉プラザを中心に取り組んできた、マルチメディアによるデジタル録音図書の作成も順調に進み、日高フィールドの保健師業務、3フィールドの公共図書館でも活用を開始できる状況が整った。これにより、これまで情報が得にくい状態にあった人に情報を届けることが直接できるが、こうした取り組みを周知することで、関係機関の意識や環境づくりを全国に広めることができると考えられる。

3) 支援事例への適応

今年度の段階では具体的な支援事例の蓄積は進んでいないが、これまで互いの機関が持つ特性を知ることが出来たことで、堺フィールドでは、医療機関と点字図書館が協働して医療専門職向けの講演会をするといった企画が具体化しており、最終年度に向けて準備が整ったといえる。

【平成 28 年度】

最終年度である今年度は、これまでに築いた各フィールドでのネットワークと、これまでに開発したプログラムやコンテンツを組み合わせながら、それぞれの地域に適した企画を実施すると共に、蓄積したノウハウやアイデアを全国に発信する取り組みを十分に実施することができた。大都市圏、大都市近郊市部、過疎地域に設定した3か所のモデル地域は、それぞれの特性を活かしたネットワークと活動を展開することができた。そして、個々の地域の取り組みを楽しみフィールドで応用しながらさらに展開する相乗効果を生み出しながら進めてきた。これらの成果は、最終年度となる本年度には、本事業の重要なカウンターパートである図書館セクションの関係者が最も集まる場の1つである「全国図書館総合展」に主催者企画フォーラムとして90分のセッションを行ったほか、3日の期間中ブースを出展し、あわせて300名もの関心の高い関係者に普及できたことは大きな成果である。さらに、個別の手法の普及と、ネットワークを生み出す具体的な場として、九州・沖縄ブロック、北日本ブロックにおいてワークショップを開催し、エンドユーザーとなる市民を対象とした活動だけでなく、それらの活動を企画する立場にある全国の図書館やがん相談支援センターに向けて発信できたことの意義は極めて大きい。

また、逗子、堺の各フィールドで作成したコンテンツ（手話字幕音声解説入り映像、機関共同作成によるブックリストなど）は、様々な地域で利用可能な媒体や媒体の雛形となっており、本事業の成果を様々な地域で活用するために有用なツールとして活用できるものとなった。

6. 自己評価

当初の計画通り、各フィールドでのネットワークはそれぞれに自主的な形での運営に移行しながら、培った活動ノウハウは、5の成果として記した通り、当初の想定以上の波及効果をもった取り組みを実施することができた。

参加機関が極めて多数であること、今年度は全国に向けた報告の場等において地域間の相互情報交換の場を複数もってきたことから、今年度は各地域ごとの最終行事においてそれぞれの総括と今後の維持・発展可能性について検討した。あわせて、事業評価の手法を応用した参加機関向けアンケートを実施して本事業のそれぞれの機関、地域における効果について評価することを予定している。

7. 外部評価

外部評価委員には、これまでも評価のみではなく、イベントへの参加をお願いしながら評価を得てきた。28年度はイベントが極めて多く、委員に出席していただけたものは限られるため、今後書面にて報告を送り、書面・電話・対面いずれかの方法による評価をいただくことを予定している。

8. 成果の展開、発展させるビジョン

本事業は、関連する研究班、文部科学研究費助成事業「市民の健康支援のための価値互酬型サービスを支える知識共同体の構築」班（研究代表者 慶応大学 池谷のぞみ）と連携して実施してきた。最終年度には特に成果の普及に取り組んではきたものの、国内全ての関係者に周知したとはいえない。よって、今後は、開催地域から希望があった際には同研究班と連携しながら、成果普及と交流の場の設定を兼ねたワークショップを実施することを内々に予定している。

申請機関の国立がん研究センターとしては、本年度ワークショップを実施した地域等で新たに生み出される好事例について継続的に情報を収集し、全国のがん相談支援センターに向けて情報共有を行なうことで、さらなる好事例が生まれる環境をつくっていく。

各地域フィールドについては、形を変えながらも連携を保っていくことで合意されており提案機関の支援がなくても連携・協力の体制が維持される見込みである。

以上